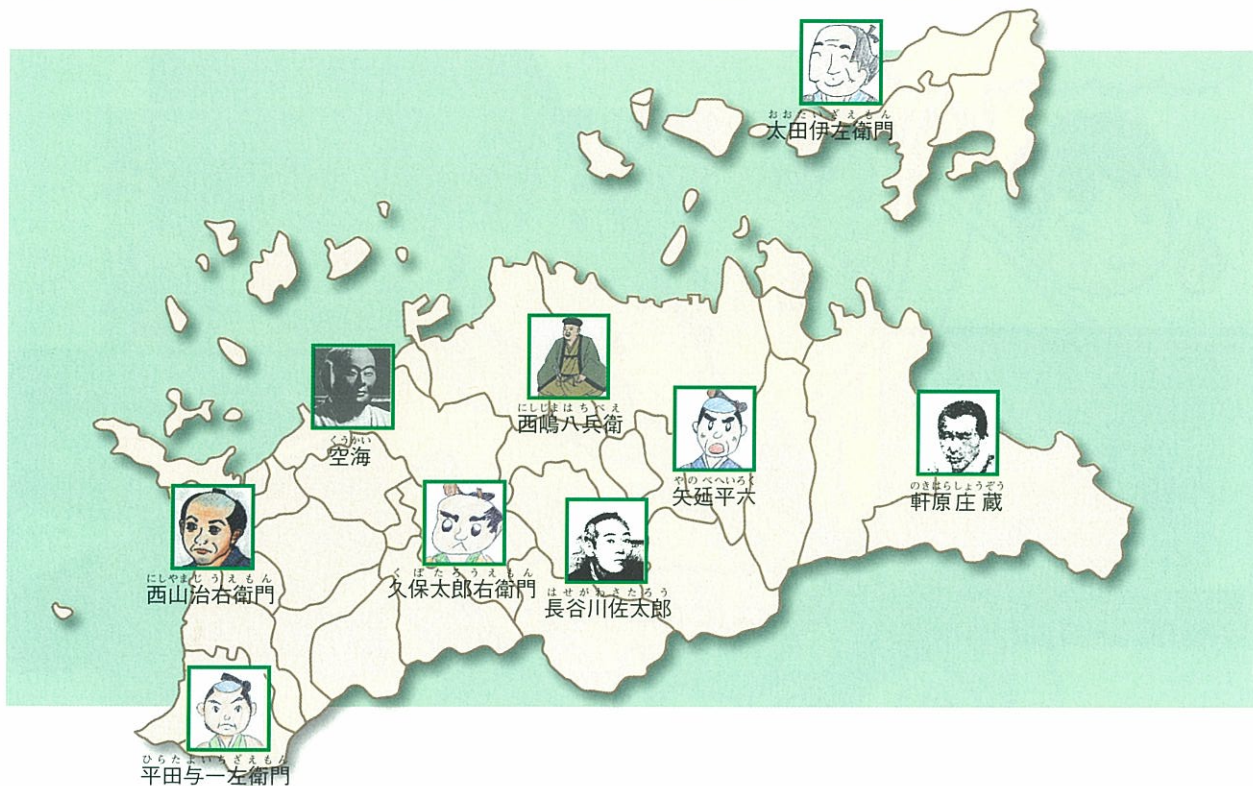




せんじん しょうかい (2) 先人の紹介

1) 水の確保に尽力した人々について調べましょう



わたしたちの住む香川県は、昔から水不足で、米をはじめ、農作物がとれなくて困ることが何度もありました。

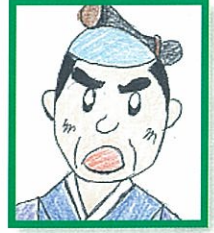
そのため、香川県の各地で、多くの先人たちが、水の確保のために大変な努力をしてきました。上の絵図や右の年表を参考にして、自分たちの地域には、どのような人物がいて、どんな活躍をしたのかを調べてみましょう。

特に、ここでは、ため池づくりに力を発揮した矢延平六（東讃地区）とため池づくりや新田開発に取り組んだ西山治右衛門・九郎右衛門親子（西讃地区）を取り上げて紹介します。

年	主な人物とため池とのかかわり
821	空海が満濃池の修理をする。
1628	この年から西嶋八兵衛が満濃池の修理に取りかかり、3年後に終わる。
1643	近江の豪商平田与一左衛門が井関池を築く。
1650頃	西山治右衛門・九郎右衛門が奥谷新池を築き、豊田の新田開発に取り組む。
1669頃	矢延平六が新池を築く。
1686	肥土山村の庄屋太田伊左衛門（典徳）が蛙子池を作る。
1707	萱原村の庄屋久保太郎右衛門が萱原用水を完成させる。
1857	富田村の庄屋で土木家の軒原庄蔵がユニークな石穴掘削で弥勒池への導水トンネルを貫通させる。
1869	この年、榎井村の豪農長谷川佐太郎が満濃池の復旧にとりかかり、翌年完成させる。

日照りから農民を救った 矢延平六

(1610 ~ 1685)



日照りに苦しむ農民たち

高松から少し南に行ったところに、浅野(香川町)というところがあります。今から330年程前、毎年の水不足のため、この浅野村の土地は荒れ、農民もお米が取れなくて大変困っていました。その年も雨が何日も降らない日照りの日が続いていました。「ああ、今年もお天道様は笑つとるが、わたらの心の中は涙でいっぱいじゃ。」と、喜助は、ひびわれた田んぼをじっと見つめていました。十兵衛も、「この田んぼは、土地の高いところや低いところがあるけん、他の村の土地とちごうて、水の便が悪いけんのう。」と言って、かんかん照りつける空をうらめしそうに見上げていました。浅野村の農民たちは、近くの神社に行って、毎日、雨が降るようにとお祈りをしました。しかし、雨は一滴も降らず、農民たちは困り果てていました。



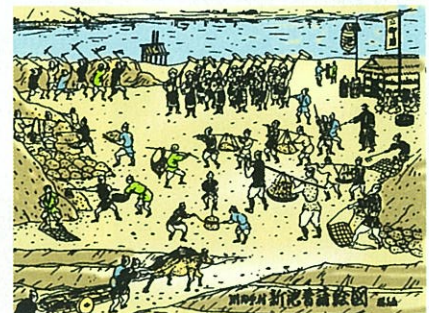
池づくりを申し出る平六

その様子を聞きつけた矢延平六は、何とか農民を救ってやりたいと思い、篠原氏・大川原氏と相談しました。平六は、これまでに仁池や大窪池など各地にため池を造り、農民たちを救ってきました。平六らは、地図を見たり、浅野の土地を実際に歩いたりして、ため池をどこに造ればよいかを丹念に調べました。そして、浅野村よりも高い位置にある川東の川内原村が最もよいことが分かり、そこに池を造ることを殿様に願い出て、許しを得ました。

苦勞の末に完成させた新池

早速、たくさんの農民たちと一緒に工事に取りかかりました。でも、池に水をためるには、さらに高い位置から、水を引いてこなくてはなりません。そこで、平六らは、さらに詳しく調査し、川東上村の川上の西側にある香東川の水を引いてくることにしました。

毎夜、農民たちにちょうちんやたいまつをもって水路予定地に立たせ、平六は向こう岸から見て土地の高低を測るなど、大変苦勞して正確な水路の位置を見つけました。農民たちも、平六の指示に従って、来る日も来る日も必死で掘りました。水は見事に池に流れ込み、農民たちも大いに喜び、浅野は豊かな土地になり、平六に大変感謝しました。



へいろく かんしゃ ほうさく ねが まつ
平六への感謝と豊作を願うひょうげ祭り

しかし、池が築かれてしばらくして、平六のことをねたんだ人が、「平六がため池を造ったのは、高松のお城を水攻めにするためだ。」と言って、その言葉を信じた殿様が、平六を裸馬に乗せて阿波国（徳島県）へ追い出してしまいました。農民たちは、平六のことを心配し、何日も何日も行方を探し求めましたが、どうとう見つけることができず、大変悲しみました。「今、わしらがこうして生きていけるのも、平六さんのおかげじゃ。喜助さんや、平六さんをお祀りしてあげよう。」と、十兵衛が言うと周りの農民たちも大賛成しました。そして、新池を見下ろすことができる高塚山に平六をお祀りし、平六の命日（旧暦8月3日）に、たくさんお米がとれるようにと願い、お祭りをするようになりました。これが後の「ひょうげ祭り」の始まりです。

浅野では、この「ひょうげ祭り」が、毎年、さわやかな秋風に黄金色の稲穂がゆれる9月中旬頃（旧暦8月3日）に行われています。高塚山の頂上に建つ「池の宮」という水神さんでおはらいを受けた後、新池に向かうところからこの祭りが始まります。ちょっと変わったお祭りで、かねとたいこのおはやし。やっこさんの列。おしろいとすみで化粧した顔に茶色のシュロの毛のちょんまげをかぶり、飼料ぶくろのまえかけ姿。1本歯の高げたをはき、真っ赤な面をかぶった天狗。サトイモの刀をさし、厚紙で作った袴と袴をつけたさむらい等、地元の人たちが仮装をして、約2kmの道のりを練り歩きます。最後は、その年の責任者が、祝詞をあげ、池に矢を放つと、みこしとともに担ぎ手の若者が新池に飛びこみます。池の周りからは、大きな拍手と歓声が起こり、祭りを挙げる人と見る人の心がひとつになって祭りは終わります。



ひょうげ祭り（香川町）

ろいとすみで化粧した顔に茶色のシュロの毛のちょんまげをかぶり、飼料ぶくろのまえかけ姿。1本歯の高げたをはき、真っ赤な面をかぶった天狗。サトイモの刀をさし、厚紙で作った袴と袴をつけたさむらい等、地元の人たちが仮装をして、約2kmの道のりを練り歩きます。最後は、その年の責任者が、祝詞をあげ、池に矢を放つと、みこしとともに担ぎ手の若者が新池に飛びこみます。池の周りからは、大きな拍手と歓声が起こり、祭りを挙げる人と見る人の心がひとつになって祭りは終わります。

おじさんの話

「ひょうげ祭り」の「ひょうげ（る）」には、「おどける」という意味があります。この祭りは、昭和30年頃までは盛大に行われていました。その後は、祭りに参加する人が少なくて何度か存続の危機がありました。近年は、全国からもこの奇祭を一目見ようと多くの人が集まっています。また、総合的な学習の時間に取り入れている学校もあり、子どもたちや町内の

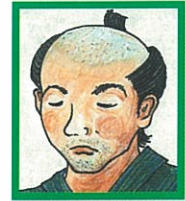


先生方もたくさん参加してくれています。町の無形民俗文化財として指定されているこの「ひょうげ祭り」は、ふるさとの心を守る大切な祭りとしてこれからも受け継がれていくことでしょう。

しんでんかいほつ 新田開発をした 西山治右衛門
くろうえもん 九郎右衛門



治右衛門



九郎右衛門

はじめに

いまから 350 年ほど昔のことです。観音寺市の豊田地区では、日でりが続くとすぐ水がなくなり、作物がとれなくなりました。それは、この豊田の土地が台地になっているからでした。

日での害にあって

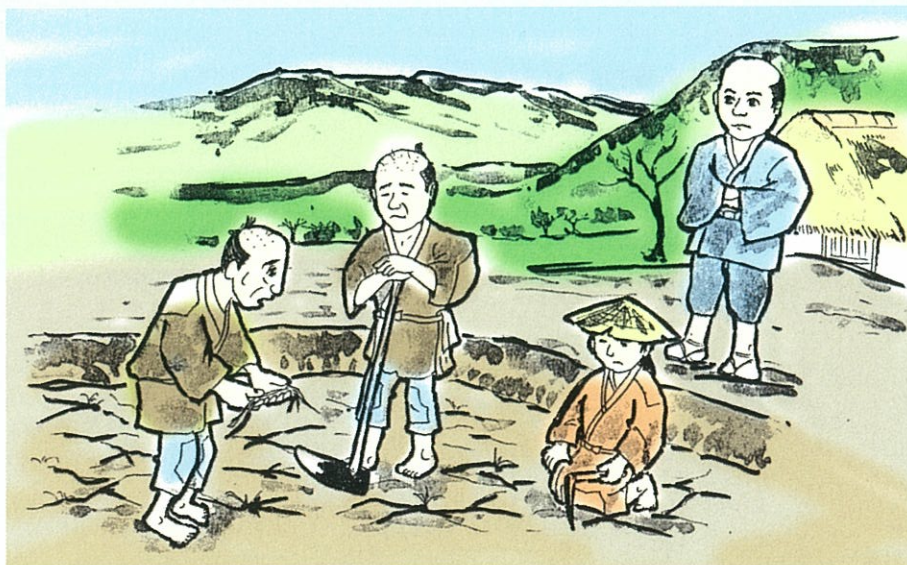
「もっと水があれば水田を作ることができるのに。」

「米がとれれば、みんなのくらしも今よりもっと楽になるのにおう。」

と、村人は、いつもこんな話をしていました。

庄屋の西山治右衛門が 38 歳の時、豊田は 3 年続いて日での害にあいました。米はとれず、あわやひえさえも育たないありさまです。食べ物がないため、体の弱い人や子どもたちが次々と病気にかかったり、死んだりしていきました。このような村のようすを見て、治右衛門は豊田に水を引いて、ゆたかな水田にしたいという強いねがいをもっていました。「山のむこうの栗井の奥谷には、夏でもたくさんの水がある。あの水を豊田にもってこれないものだろうか。」

そのねがいをかなえようと治右衛門の子、九郎右衛門は 1 年がかりで用水路作りを計画し、工事のゆるしをもうしてました。ゆるしをもらった九郎右衛門は、さっそく工事にかかりました。



苦勞の末に完成させた新池

「いくら奥谷の水があるからといっても、豊田に水を分けたら粟井に水がなくなる。」と、すぐに山向この粟井村の人たちから、反対の声がおこったのです。

九郎右衛門は、水をきちんと分けるための『分岐』というしくみや奥谷の下に新しい池（奥谷新池）を作り、粟井の水がなくなならないように工夫していることを話しました。反対していた人たちも、九郎右衛門の熱心な心にうたれてきちんと水を分けるというやくそくでさんせいしてくれました。

ふたたび工事が始まりました。用水路はどんどんのびていきました。そして、1年がたつと奥谷まであと少しのところまでできました。

大きな岩をくたく工夫

「大きな岩じゃ。大きな岩がつづいとるぞ。」

「えい！くわをうちこんでもびくともせんぞ。」

「この大きな岩をくだかんことには用水路はつけられんで。」

「ああ、そこに水があるのにのう。」

くわをうちこんでも、のみでたたいても、

大岩はびくともしませんでした。そのうえ、こ

の大岩は奥谷の方へ300メートルも続いていたのでした。九郎右衛門も村人もがっかりしてしまいました。すぐそこに水があるのにどうすることもできないのです。

九郎右衛門はどうしたら大岩がわれるのだろうかと考え、いろいろな方法をためしてみました。しかし、なかなかいい方法は見つかりません。夜おそくまで考える日が続きました。

「そうだ。これならできるぞ！」

思わずひざをうった九郎右衛門は、村人たちに言いました。

「みんなもえるものをいっぱい集めて大岩にのせてくれ。」

大岩の上には、かわいたイモのつるや木がつみ上げられ、火がつけられました。夜も昼も休むことなしにもやされました。

3日目の朝がきました。九郎右衛門は言いました。

「今度は、大岩に水をかけるんだ。」

ジュジュジュー

おそろしく大きな音を立てて水けむりがあがりました。急にひやされた大岩の表面にはたくさんのひびが入っていたのです。つるはしを打ちこむと、さすがの大岩もポロリポロリとくずれていきます。



「おおっ！」

くろうえもん はたけ
九郎右衛門は、畑で、イモのつるをやいたとき、よくやけた後の石にひびが入っ
ていることを思い出し、おな おおいわ
同じことを大岩でためてみたのです。こうしてふたた
びこうじ つづ
工事は続けられ、ついにあわい おくだに とよた ようすいろ かんせい
粟井の奥谷から豊田までの用水路が完成しました。



豊田台地に水が

ようすいろ けいかく ねん すいもん
用水路をつくろうと計画して3年。水門があげ
られると、やがておくだに みず ようすいろ
奥谷の水がゆっくりと用水路を
つたってとよた むら なか
豊田の村に流れこんできました。

「みず
水がやってきたぞ。これで米がとれるようにな
るぞ。」

くろうえもん
「九郎右衛門さんのおかげだ。ありがたいこと
だ。」

むらびと こえ むらじゅう ひろ
村人たちのよろこびの声が村中に広がっていき
ました。そのようす み くろうえもん め ひか
の様子をうれしそうに見ていた九郎右衛門の目もなみだで光っていました。



こばらいけ なか で ようすいろ
小原池から流れ出る用水路

二人の業績をたたえて

こばらいけ なか で ようすいろ いま とよただいち たはた
小原池から流れ出る用水路は、今なお、豊田台地の田畑
をうるおしています。そして、そのちいき ちいき しんでん
地域には「新田」とい
うなまえ
名前がついています。

また、そのちいき ちいき じうえもん くろうえもん ぎようせき
地域には治右衛門・九郎右衛門の業績をたた
えてにしやまじんじゃ なまえ じんじゃ た
えて西山神社という名前の神社が建てられています。



にしやまじんじゃ
西山神社